十全同窓會會報

〒920-8640
金沢市宝町13の1
金沢大学医学部
十全同窓会
編集委員会
印刷／ヨシダ印刷㈱

新年のご挨拶

十全同窓会会長　佐藤　保

会員の皆様、明けましておめでとうございます。昨年は平成に変わって早くも二十年が経過しましたが、歳月の速さと社会変貌の激しさに唖然とした一年でありました。時代の特徴を一言でいえば、グリーンスパン氏が唱える「波乱の時代」の幕開けでしょうか。

まずアメリカのサブプライム問題に端を発した金融恐慌が瞬く間に全世界に波及し、百年に一度といわれる不況に見舞われたことです。この背景には、実質上のGDPをはるかに超えてだぶついた投機マネーのバブルが存在しており、それが住宅ローンの破綻を契機にして一挙に崩壊するという、資本主義固有の欠陥が透けて見えます。九十年代すでにバブルの崩壊を経験し、比較的影響が少ないと思われていたわが国も、急速に進んだ株価の下落と円高で、世界のトップレベルにあったトヨタすら、年間収益を三〇パーセント下方修正せざるをえない不況に見舞われました。まして自転車操業を余儀なくされている中小企業にいたっては、一挙に倒産件数が急増し新規雇用を取り消す事態となり、この先どうなるのか予断を許さない危機的状況にあります。

この金融恐慌が逆風となって、共和党のマケイン候補は大統領選挙で敗退し、アメリカの歴史を塗り替える変革といってよい、オバマ大統領の誕生をみました。無論、大統領が変わったところで危機的状況は変わりませんが、ブッシュ大統領時代に世界のリーダーとしての役割を失いつつあったアメリカが、今回の大統領選挙で、いまだ歴史を変えるエネルギーを失っていないことを世界に示し、アメリカ社会がこれからより良い方向に変わるのではないかという期待を抱かせる結果となりました。

一方、国内に目を転じますと、小泉内閣がおこなった構造改革は、平等中流社会に格差の拡大ばかりをもたらし、その後、安倍、福田、麻生と短期間に三人も首相が交代するという政治不安を生み出しました。福田首相が提案した五つの安心プラン、高齢者が安心して暮らせる社会、誰もが医療を受けられる社会、子供を守り育てる社会、働く者が将来に希望を持てる社会、厚生労働行政に対する信頼の回復、どれ一つとして目途が立たないうちにご本人が退陣してしまい、国民はあっけに取られた思いで取り残され、安心できる社会が本当にやってくるのか、一向に先がみえてまいりません。

それどころか、懸念された「医療の崩壊」が現実のものとなり、刑事告発された福島県立大野病院事件以来、産科医療の縮小ばかりでなく一般病院にも萎縮医療をもたらす結果となりました。もはや地域医療ばかりでなく、大都会でも安全に出産ができない時代が到来しております。医師不足の対策として厚生労働省はようやく医学部の定員を増加する対策を打ち出しましたが、これが効果をもたらすのにはこの先十年の歳月を要します。

さらにこのままでは破綻確実な医療保険制度、高齢者の社会保障制度をどう立て直すのか、増大する社会保障費の財源をどうするのか、これらの難問が今後の政府に喫緊の課題として要求されます。安定した政権が誕生して、これら課題の着実な解決が国民の願いでありますが、新年の初夢に終わることのないよう祈りたいものです。

目次

新年のご挨拶……1
教授就任挨拶……2
受賞……3
学会報告……4
同窓生の消息……5
十全学術行脚　第十四回……6
キンストレーキ国宝修理所へ……7
金沢市近代医学史跡めぐり……7
病院紹介……8
教室だより……10
支部だより……12
クラス会……14
医学部百五十年史のための覚え書〔24〕……16
金沢大学（医学部）開学の起点について……17
医学展を終えて……18
医学展に参加して……18
学生コーナー……19
第二回金沢大学ホームカミングデイ開催……21
教授退職記念及び
退任記念講演会・記念式のお報せ……21
四高桜募金のお願い……21
編集後記……22

教授就任挨拶

吉崎　智一博士（昭和六十一年卒業）

感覚運動病態学教授に就任

この度、母校金沢大学の耳鼻咽喉科・頭頸部外科学教室教授に就任いたしました。当教室は開講以来一世紀を経過して、私で第九代目の教授となります。毎朝出勤して参りますと、本教室歴代主宰者八名の先達のポートレイトとご挨拶をするところから一日が始まります。就任してわずか一週間しか経過していませんが、先代教授である恩師古川副学長が「自分が次の走者にバトンを渡すまでしっかりと走りきらなければならない」と常々おっしゃっていたバトンの重さをわかりかけて参りました。

社会のめまぐるしい変化に伴い、医療および大学を取り巻く環境は、当然変化を強いられます。新医師臨床研修制度の制定をまさに引き金として、これまで黙認もしくは封印されていた多くの問題が噴出して、各々の課題に的確に対処できない医療機関、大学、さらには自治体までも淘汰されそうな勢いです。耳鼻咽喉科・頭頸部外科ももちろん人手不足を筆頭とする逆風が吹いています。しかし、これは逆にいえば、少数を精鋭として鍛錬するにはいい機会であるとポジティブにとらえるようにしています。ややもすると、自由度が少なく、居心地がよくないイメージがある大学という場所ですが、本来大学というのは、自由の象徴であるべき場所です。教室員の才能、モチベーションを十分に引き出して、その結果、教室自身が活性化し、さらに教室員の自発的な研究診療活動、さらには、人間形成にもポジティブな関与ができる、血の通った、懐の深い教室作りを目指して次の走者にバトンを渡すまで走り続けてゆく所存です。

皆様には、これまでいただきましたと同様にご指導ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

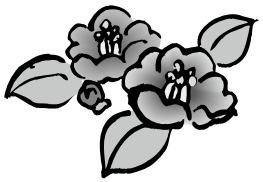
犀川　太博士（昭和五十八年卒業）

金沢医科大学発生発達医学教授に

この度、平成二十年七月一日付で金沢医科大学発生発達医学（小児科学）の部門教授を拝命いたしました。私は、昭和五十八年に金沢大学医学部を卒業し、同大学小児科学教室の小泉晶一教授（現、金沢大学子どものこころの発達センター特任教授）のご指導のもと小児血液悪性腫瘍の診断・治療、および研究に従事してまいりました。平成二年から六年まで米国国立衛生研究所（ＮＩＨ）の癌研究所（ＮＣＩ）にて癌の基礎研究に従事し、その後の研究基盤を培いました。

金沢医科大学では専門とする小児血液悪性腫瘍はもとより、幅広い小児疾患に対応する質の高い専門医療の提供を目指してまいります。さらに、小児科を取りまく諸問題（地域医療、成育医療、小児救急医療、小児科医の育成）に早急に取り組む必要があります。しかし、この大きな問題は一大学のみで対応することは不可能です。金沢大学病院、中核病院、そして、地域医療を担う開業医の諸先生方との連携を密にしてこの問題にあたりたいと存じます。そして、一人でも多くの小児科医を目指す医師が集る魅了ある教室作りに精進する所存です。

なにとぞ、十全同窓会の諸先生方よりのご支援とご指導を賜りますようお願い申しあげます。



本学医薬保健研究域保健学系
医療科学領域病態検査学教授に
血液情報統御学
藤田信一博士

本学医薬保健研究域保健学系
医療科学領域病態検査学教授に
血管発生発達病態学
笠原善仁博士

受賞

梅田　俊彦先生（昭和三十五年卒業）

金沢市文化賞受賞

平成二十年十一月三日文化の日に、金沢市文化賞を受賞いたしました。誠に名誉なことと大変喜んでおります。賞状には「永年にわたり医師として地域医療に従事するとともに医師会長としてレントゲンによる高精度のがん検診システムの開発を主導し我が国の医療に新たな進歩をもたらしたほか医療関係者の指導育成にも尽力し地域の医療・保健の充実、市民の健康づくりを通じ本市文化の振興に寄与された功績はまことに顕著であります。ここに金沢市文化賞条例の規定により金沢市文化賞を贈呈し表彰します　平成二十年十一月三日　金沢市長　山出　保」と書かれています。

私が金沢市医師会長の時代（昭和六十三年～平成八年）に、今は亡き故高島力教授、故磨伊正義教授の指導で、肺ならびに胃がんの施設検診の全てのフィルムを医師会に集め、ダブルチェック方式で読影し、見落としを少なくするシステムを構築したことが表彰されたものです。云うまでもなく私個人に与えられたものではなく、金沢市医師会員ほか多くの関係者に対してのものです。

当時は私も若かったので、精度向上のために、フィルムの全てを医師会館へ集めることを、一部の反対意見を押し切って実行しました。全ての検診担当医を読影委員としたことで読影技術が高まり、画像の良質化を齎しました。今後とも、かかりつけ医として地域医療に微力ながら貢献したいと思います。

古川　仭副学長・病院担当理事（昭和四十四年卒業）

北國文化賞受賞

このたび、第六十二回北國文化賞の受賞にあずかり感激しています。この気持ちを昨年夏、他界された波多野基一教授と分かち合いたい思いで一杯です。上咽頭癌の発症にエプスタイン-バー ウイルス（EBウイルス）がどんな係わりがあるのか、その一心で大学院進学を決心し昭和四十六年、癌研ウイルス部の波多野門下に入りました。教授の厳しいご指導と研究室同門の先生による親切なご指導のおかげで、腫瘍ウイルス学の基礎を学ぶことができました。当時、癌研でもEBウイルスは未知の分野であり、ほとんどゼロからの出発でした。上咽頭癌は上皮系細胞の癌である以上、ウイルスは上皮細胞に感染しなければなりません。しかし、いくら実験を繰り返しても感染の兆しはなく、最初から悪戦苦闘の連続で暗礁に乗り上げました。ヒントは、EBウイルス陽性リンパ球と陰性上皮細胞との混合培養から得られました。他とは異なる大型細胞の出現に注目したことが、細胞融合によるゲノムの移行という考えに結びつき、その後は癒合ウイルス（HVJ）を使った実験的腫瘍細胞の樹立化やヌードマウスへの移植実験など、研究は急発展した事を昨日のことのように思います。現癌研所長佐藤博教授がラインバーガー研究所（米国、ノースカロライナ州）へ留学され、教室員の海外留学の道が開けたことも幸運でした。教室からはすでに八名のポスドクがその恩恵に浴し、研究の発展と継続に寄与しました。その意味で今回の受賞は個人の栄誉としてではなく教室の成果と受けとめたいと思います。現在、EBウイルス研究として金沢大学が不動の位置にあることにおいては、「道を開く」ことに貢献できたかもしれません。

秋の叙勲

旭日中綬章
大家　啓一
（昭和三十四年卒業）

瑞宝中綬章
山口　成良
（昭和二十七年卒業）

瑞宝小綬章
坪田　謙
（昭和二十九年卒業）

旭日双光章
伊與　曉洋
（昭和三十五年卒業）
菓子井幸則
（昭和二十八年卒業）
齊藤　榮宏
（昭和三十六年卒業）
横井　衛
（昭和二十四年専門卒業）

瑞宝双光章
金城　國昭
（昭和三十一年卒業）

万が一遺漏がある場合は御寛恕の上お知らせ頂ければ幸いです。

日本病理学会学術研究賞（A演説）

形態機能病理学
原田　憲一博士（平成三年卒業）

本年度の日本病理学会学術研究賞（A演説）を受賞し、平成二十年十一月二十～二十一日に愛媛県松山市で開催された第五十四回日本病理学会秋期特別総会において、受賞式ならびにA演説（受賞講演）の機会をいただきました。同賞は病理学領域における優れた学術研究かつ蓄積された研究に対して贈られるもので、私が入局以来研究してきました胆道系疾患の病態解明についての研究内容を評価いただきまして、大変うれしく光栄に存じます。近年は、特に胆道系自然免疫の解析を中心に行い、原発性胆汁性肝硬変、胆道閉鎖症、肝内結石症などの胆道系疾患に見られる胆管病変の病態形成に胆道系自然免疫応答が深くかかわっていることを明らかにしてきました。今後も胆道系疾患の病態解明を目指して、若手研究者と精力的に研究していく所存です。十全同窓会の先生方におかれましては、今後ともご指導ご鞭撻いただきますよう宜しくお願い申し上げます。最後になりましたが、今回の受賞は、直接ご指導いただいております中沼安二教授をはじめ、金沢大学形態機能病理学教室にて一緒に研究に携わった先生方、また平素よりご協力いただいております国内外の先生方のご協力によるものであり、関係各位の先生方に深く御礼を申し上げたいと思います。

日本糖尿病合併症学会YIA受賞

血管分子生物学
山本　靖彦博士（平成四年卒業）

平成二十年十月三日、日本都市センター（東京）で開催されました第二十三回日本糖尿病合併症学会において「遺伝子改変技術を用いた糖尿病合併症の発症機構とモデル動物開発に関する研究」でYoung Investigator Awardを受賞しました。このような栄誉ある賞を頂けましたのも大学院時代からの師であります血管分子生物学・山本博教授をはじめ教室の皆様方の多大なるご支援ならびに激励によるものです。改めまして心から感謝申し上げます。私は平成四年本学卒業後、内科学第一教室で糖尿病の臨床・研究の教えを受けました。その後、基礎研究室に移りましてからも糖尿病、なかでも糖尿病血管合併症の発症メカニズムの解明と、それを標的とした新たな治療法の開発を目指して研究を進めてきました。東北大学・岡本宏教授の下で生化学・実験動物学の研鑽を積みましたことも今回の受賞の礎となっております。さらに学内はもとより国内外において広く共同研究を展開することができ、多くの方々から教えを乞うことができました。この場をお借りしまして共同研究者の方々にも御礼申し上げます。今後も糖尿病学、糖尿病合併症研究の発展に少しでも寄与できますよう精進いたす所存です。

最後になりますが、今後とも同窓会の皆様のなお一層のご指導とご鞭撻を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

学会報告

The 6th Korea-Japan Joint Symposium on Vascular Biology and the 16th Annual Meeting of Japan Vascular Biology and Medicine Organization Joint Meeting

本合同学術集会は、平成二十年十二月三―五日、石川県立音楽堂交流ホールを会場に開催された。Korea-Japan Symposium on Vascular Biologyの日本での開催は三回目、日本血管生物医学会学術集会との併催は二回目となる。今回は、全体を国際会議と位置づけ、全プログラムを英語で通して行った。山本（会長）と渡邉琢夫教授（以上、血管分子生物学―旧生化学二）、多久和陽教授（プログラム委員長、血管分子生理学―旧生理学一）、山岸正和教授（臓器機能制御学―旧内科学二）、渡邊剛教授（心肺総合外科学―旧外科学一）、松田武久教授（金沢工業大学ゲノム生物工学研究所）が組織委員会を構成し、準備と運営にあたった。日本血管生物医学会は二〇〇四年、日本血管生物学会とVascular Medicine学会が統合して創設され、基礎科学と臨床医学の良好な連携を特徴としている。本合同学術集会は「血管生物医学の新次元」を基本テーマに、コンセプト、方法論、実験モデル、バイオマーカー、創薬、デバイス、画像化、診断、予防、治療など、様々なレイヤーで新次元の開拓を目指した。昨年は高安病が金沢の地で最初に記載されてから百周年にあたることから、Takayasu Memorial Lectureも設け、東京大学永井良三教授に講演いただいた。グローバルな経済危機と円高にもかかわらず、海外から七十名余、計約二二〇名の参加を得、一四〇を超すプレゼンテーションがなされた。ハイレベルの発表、討論と活発な交流がなされる中、滞りなく所定の全プログラムを盛会・好評裡に完了し、一年後の再会を約して散会した。ご支援ご協力いただきました皆様に心より御礼申し上げる次第です。

（山本　博　記）

韓国ウルサン大学医学部との部局間交流

二〇〇八年十月二十四日、金沢大学医学系研究科と韓国ウルサン大学医学部との間での研究、教育の相互の協力を目指した部局間交流協定書が、金沢大学医学系研究科長中沼安二教授と韓国ウルサン大学医学部長ヤ・ダム・リー教授との間で金沢大学医学系研究科で締結された。これに先立ち、韓国ウルサン大学医学部長ヤ・ダム・リー教授、病理学エンシル・ユ教授、外科学ビョウシク・キム教授、内科学ドン・ワン・ソオ教授が、金沢大学学長室に中村信一大学長を表敬訪問した。翌日の十月二十五日は、部局間交流を記念して肝胆疾患の国際シンポジュウムが開催され、韓国側四名の教授、また本学四名の研究者が発表し、多数の聴衆を交え、活発な討論がなされた。

ウルサン大学本体は、釜山市近くに位置し、韓国の大財閥現代が経営する大学で、医学部は三つの附属病院を持っており、医学部はソウル市にあるアサンメディカルセンターにある。医学部入学定員は四十名で、韓国全体の大学受験生約二十万人のトップ百名の中から選抜される超エリート医学部である。アサンメディカルセンターは三千床近いベット数を有し、肝胆の患者数、医療レベルは韓国でトップで、肝胆疾患の拠点病院であり、肝移植数は年間三百例以上で、東アジアでは現在、トップにある。金沢大学医学系研究科も、肝胆の研究ではわが国で主導的立場にあり、病理学の中沼教授、放射線科の松井教授も既に数回、アサンメディカルセンターで講演を行っている。また、アサンメディカルセンターの肝胆グループも金沢大学医学系研究科の肝臓グループとの共同研究に強い関心を持っている。この様な気運の中で、研究、教育の相互の協力を目指した部局間交流協定が締結され、今後の共同研究が期待される。

（中沼　安二　記）

同窓生の消息

第十三回日本神経精神医学会の金沢開催

金沢医科大学精神神経科学教室教授　地引　逸亀（昭和四十四年卒業）

平成二十年十一月二十七日（木）、二十八日（金）の両日、金沢市アートホール（ＪＲ金沢駅前）にて第十三回日本神経精神医学会を会長として主催させていただきました。この学会は精神科領域の中でも認知症や器質性あるいは症状性精神障害を主に対象とし、神経内科との学際的な学会でもあります。会員はまだ三六〇名ほどの小さい学会ですが、神経病理学、神経心理学、老年精神医学、行動神経学などの専門家が集まるややclosedな同好会としての印象があります。私も認知症や神経心理学に若い頃から興味があり、教授として金沢医科大学に着任してからも教室研究の重要な柱としてこの領域には力を入れてきました。幸い、前任の鳥居方策教授（旧制金沢医科大学昭和二十九年卒業）が神経心理学の大家で、先生の薫陶を受けた教室員も残っていた関係で、この学会には教室をあげて参画してきました。その関係で今回、会長のお鉢がまわってきたようなわけです。本学会ではシンポジウムとして「老年期認知症の日常臨床の問題点」、ワークショップとして「器質性（症状性）精神障害の臨床」というかなり大まかなタイトルで、それぞれ四演題ずつの講演を新進気鋭の若手の先生方にしてもらいました。そのシンポジウムには金沢大学医学部の神経内科教室からも吉田光宏先生に「レビー小体型認知症における123I-MIBG心筋シンチグラフィー」と題した講演をしていただきました。一般演題二十五題、ランチョンセミナー二題、モーニング、イブニングセミナー各一題、また私が会長講演として「てんかんの新しい国際分類」に関する話をさせていただきました。参加人数は一二〇名ほどの小学会ではありましたが、アルツハイマー病、レビー小体病、前頭側頭型認知症などを主な対象として、一つの発表にかなり時間をかけてactiveな質疑討論が行われました。私どもの教室員も多数の演題発表をし、相当緊張したとは思いますが大変良い経験になったことと思っています。

最後にセミナーの座長など今回多大なご協力を頂いた金沢大学神経内科山田正仁教授、また一般演題募集にご協力頂いた福井大学医学部精神科の和田有司教授（昭和五十二年卒業）、金沢大学医学部精神科の三辺義雄教授（昭和五十三年卒業）、富山大学医学部の鈴木道夫教授（昭和五十九年卒業）の同門の先生方にこの場をかりて御礼申し上げます。

今回の十全行脚は、千葉大学大学院生殖機能病態学（旧産婦人科学）生水真紀夫教授（昭和五十六年卒業）、千葉大学大学院がん分子免疫治療学高橋豊教授（昭和五十六年卒業）に近況をご報告いただきました。

生水真紀夫 教授

千葉大学医学部は、千葉市のほぼ中央に広いキャンパスがあります。亥鼻（いのはな）台という高台にあって、幹周りが一〇mを越えるような古木もそこここに残っていて緑に恵まれています。医学部と附属病院とは五〇〇mほど離れていて、杏と桜の並木で結ばれています。左右から伸びた枝で出来た緑のトンネルをくぐって病院と医学部の間を毎日往復します。春には杏・桜のピンク、新緑を経て夏の深緑、そして晩秋には紅葉を愉しみながらの往復です（桜は、もみじにもひけをとらないくらい綺麗に紅葉します。あまり知られていないのは、花と同じように色づいてすぐに落葉してしまうからでしょうか）。初夏には、熟した杏子が病院レストランでジャムに変身します。夏の暑い日、桜の葉は強い日射しを和らげてくれる貴重な存在です。

平成十七年の暮れに千葉大学に赴任しました。生殖機能病態学（旧産婦人科学）という大学院講座と婦人科・周産期母性科（旧産科）を担当しています。現在のスタッフは、教授一、准教授二、講師一、助教九、医員二、後期研修医二、大学院生五です。独立行政法人化に伴い定員削減圧力が強くなっていますが、基礎講座のご配慮で現状のスタッフを維持させていただいています。この二年あまりは、新臨床研修制度への移行に加え、福島県立大野病院事件の刑事訴訟や妊婦救急対応の問題など産婦人科にとって強い逆風が吹き、新人医師のリクルートも困難でした。現在は、メディアの論調も産科批判から現状の把握と問題認識へと変わってきました。国も無過失保障制度など様々な支援策・医師確保対策を実行し始めました。幸い、千葉大でも周産期母性科に専任の教育スタッフを置くことができましたので、学生・研修医を対象に様々なセミナーやツアー、新生児蘇生法実技認定講習会などを企画して産婦人科への理解と関心を高めてもらう努力をしています。

千葉県は六百万を超える人口を抱える一方で、医学部は一校のみですから、人口当たりの医師の数は全国平均よりもかなり少なくなっています。ハイリスク分娩が大病院に集中する傾向が益々強くなり、千葉大学の分娩数もこの二年で倍近くに増加しました。稀少例も含め多くの症例を短期間で経験できるというメリットがありますが、反面一人の患者さんに割く時間が少なくなって、よく考えないうちに流してしまうことになりかねません。一つひとつの症例を大切にすることを強調しています。

千葉大学産婦人科では、先代・先々代の教授が悪性腫瘍と絨毛性疾患を専門として輝かしい成果を挙げてきました。現在も伝統を受け継いで診療や研究を進めており、絨毛性疾患の患者数では全国でも一二を競う数を誇っています。私が赴任してからは、分子生物学的な手法を診断や研究に導入することで、さらなる発展を目指しています。研究室の整備もようやく整いつつあり、大学院生も少しずつですが増えてきました。今後は、研究業績でも金沢大学の良きライバルになれるようにしたいと考えています。

金沢、千葉ともに旧六の伝統を受け継いだ大学です。物理的な距離は遠い（電車だと五時間以上かかります）のですが、心理的な距離は近いように思います。金沢大学の井上正樹教授とは学生講義を通じて相互交流させていただいています。昨年、がん分子免疫治療講座に高橋豊教授が赴任されました。今後とも、金沢大学との交流を深めたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

高橋　豊 教授

平成十九年十月に千葉大学大学院医学研究院がん分子免疫治療学講座に赴任してから、ようやく一年経過しました。新しい教室ということで、まだまだ立ち上げの段階ではありますが、現状をご報告させて頂きます。

千葉大学は、東京湾から二kmしか離れていない小高い丘に、医学部と薬学部と医学部附属病院があります。最近新病棟が開設されました。冬の晴れた日には、研究室の窓から東京湾とその向こうに雪景色の富士山、そしてそのふもとに東京の高層ビル群、さらにそれらを背景に羽田空港に離着陸する飛行機がはっきりと見えます。一方で、風が強いため、雨が降った時は、研究室から病院までの二〇〇mほどの距離を歩くだけで、傘をさしていてもびしょ濡れになってしまいます。

私が提唱しましたTumor dormancy therapy、つまり癌との共存という概念は、ほぼ癌治療界で広く受け入れられ、特に抗癌剤の効果判定には「不変」が有効と評価されるに至りました。この流れの中で、これまで「不変」という効果しか得られなかった治療が再評価されるようになって参りました。その一つが免疫療法です。特に、特異免疫療法と呼ばれる、ペプチドワクチン療法、樹状細胞療法はアメリカやヨーロッパの臨床腫瘍学会でも数多く発表されるようになり、また巨大な製薬会社がこの分野に参入したことなどから、特異免疫療法に強い関心が寄せられています。

当教室は、特異免疫療法の一つである樹状細胞療法を中心に、ペプチド樹状細胞療法の開発、また抗癌剤や放射線療法との併用、併用時の適切な投与量や照射量の検討などを実験的に研究しております。今後はこれらの成績を速やかに臨床に応用するため、いわゆるtranslational researchとしての役割を担いたいと思っております。また、私自身は関東地方の臨床試験グループに参加し、従来の抗癌剤治療の改革を進めています。また今年度から始まった医学部学生を対象とした臨床腫瘍学の一部を、来年度から担当することになりました。

がん拠点病院の普及などにより、癌治療の標準化、均てん化がほぼ定着して参りましたが、一方で標準治療終了後の治療が問題になりつつあります。私が在籍しておりました金沢大学がん研究所臨床部、がん高度先進治療センターが、今後そういった患者様の治療を担当することになると思われます。平成二十年七月に亡くなられました、恩師磨伊正義先生の長年の目標であった、癌の克服を目指し、金沢大学の皆様のご協力を得ながら微力を尽くしたいと存じます。今後も何卒よろしくお願い致します。

キンストレーキ国宝修理所へ

キンストレーキは十九世紀前半フランスの解剖学者オズーによって製作された精緻な人体模型で、百三十のパーツ、千七百のサブパーツから成るとされています。金沢大学が保有するキンストレーキは、わが国に現存する四体のうち、すべての臓器・組織を内蔵し大きな損壊を免れている全身男性体として唯一のものです。長崎の一体は被爆し、福井の一体は倒壊、東京の二体は関東大震災で焼失しました。女性体としては福井の一体が知られており、保存状態良好です。キンストレーキの現存はオランダ・グロニゲン大学、英国・アバディーン大学など国際的にも極めて少なく、したがって、本キンストレーキは世界にとっても第一級の歴史的資料であり、適正に保守がなされた場合にもつ教育上美術上国際上の価値は計り知れません。しかし、長年に亘る埃の付着、カビの発生、彩色顔料の剥離・剥落等による損傷が著しく、崩落の危険性が極めて高いこと、また一旦崩落した場合の復元は不可能と分析・判断されることから、緊急な修復が求められていました。医薬保健研究域と医学系研究科は、概算要求事項として国に要望するなど、修理のための予算措置を種々の方面に諮ってきたところですが、この度学長戦略経費から担保される運びとなりました。従来分析・見積もりを依頼してきました財団法人美術院国宝修理所（藤本青一所長）で修理されることになり、去る平成二十年十月二十二日、修理のため医学部記念館から搬出されました。写真はその折の光景です。美術院国立奈良博物館工房古谷健治技師により向こう約一年半に亘る計画で修復がなされる予定です。修復成ったキンストレーキが同窓の諸兄姉に披露される日が待たれます。

（山本　博　記）

金沢市近代医学史跡めぐり

平成十九年度に続き、平成二十年九月十九日（十時三十分～十七時）に、平成二十年度医学類新入生に対する「アーリーエクスポージャー」（附属病院での病棟実習、手術部、検査部等の見学など）の一環としての「金沢市近代医学史跡めぐり」が実施されました。この史跡めぐりは、新入生に入学後の早い時期から金沢大学医学部の歴史と伝統に触れてもらい、これから勉学に励む金沢に愛着を持ってもらうとともに、歴史のある金沢で医学を学ぶモチベーションを高めてもらいたいという同窓会の願いから、昨年から企画されているものです。

今年度の史跡めぐりは、昨年の経験からいろいろ検討を重ね、バスでめぐる際の駐車場事情やガイドの先生の都合などを考慮して、卯辰山の解剖塚（本学の解剖体墓地など）まではバス二台で学生全員を案内し、そこからは学生たちに配布した史跡の資料・地図に基づいて思い思いの方法（バス、徒歩など）で見学をしてもらい、史跡めぐりと市内めぐりの両方を兼ねた形で実施することになりました。学生たちは史跡を見学しながら、中間ポイントである旧第四高等中学校本館に立ち寄り、最終的に医学部棟で最終チェックを受ける、というオリエンテーリングのような方式で行いました。

今回、最低でも卯辰山の解剖塚、旧第四高等中学校本館、そして医学部にある黒川良安レリーフ像の三カ所をめぐれるように設定しましたが、その他にも卯辰山の養生所跡、ホルトルマン愛児の墓、彦三種痘所跡などの史跡も見学できるようにルートを考えました。当日は私も四高本館のチェックポイントで待機していましたが、やはり最近の学生気質の現れでしょうか、解剖塚見学の後、携帯電話でタクシーを呼び、まっすぐ旧第四高等中学校本館へ来て、バスで医学部まで帰るという学生が多いようでした。中には四～五人の学生で卯辰山から歩いて降り麓からバスに乗ったグループや、ずっと徒歩で来たというグループも少数ながらいたようです。

大学側としては、今回の史跡めぐりにより新入生たちの心に金大医学部の歴史が少しでも刻まれ、今後の勉学の励みにして欲しいと願い、いろいろ考えて準備を行ってきました。しかしながら、終了後に行われたアンケートでは、他に実施されたアーリーエクスポージャーの手術部見学などに比べると評判が悪いようで、来年度の実施に向けてはさまざまな検討課題があるように思われます。現代気質の学生に対してどういう形で医学部の歴史と伝統を伝えていくか、についてはまだまだ試行錯誤が必要なのかもしれません。最後に、本企画の実施にあたってご尽力いただいた同窓会会員各位、医学部事務各位、特に学務係の方々に深く感謝いたします。

（清水　徹　記）

病院紹介

公立能登総合病院

沿革

当院が立地している七尾市は能登半島のほぼ中央にあり、戦国時代後期からは前田利家が初めて城持ち大名となった時の城下町として栄えたところです。現在は人口六万で中能登町を加えた八万人が対象となる地域で広域事業の七尾鹿島広域圏事務組合を設立しており、当院の運営母体となっています。二次医療圏は能登中部医療圏で、二市三町からなり、対象人口は十四万人余りです。

当院の発足は昭和十八年に遡りますが、農業界を基盤とする「医療利用組合連合会能登病院」（病床数九十七床、診療科目七科）としてスタートしました。しかし、その三ヶ月後には「石川県農業会能登病院」と改称。次いで昭和二十三年に「石川県厚生連能登病院」に、昭和三十一年には「七尾鹿島国民健康保険団体連合会直営能登病院」、そして昭和三十五年には「能登病院」とめまぐるしく変わり、昭和四十年にようやく現在の「公立能登総合病院」に落ち着いた次第です。経営母体の変遷がなせる技でした。

この間病院は一度移転しており、旧病院は増築され、昭和四十七年に「公立能登第二病院」と改称し、独立した精神病院として再出発しています。本院の方は平成十二年に二度目の移転新築を行い、現在七尾湾を一望する緑に囲まれた小高い丘の上に白亜の城塞のような偉容を誇っています。平成十三年には第二病院もこの丘に移転し、精神センターとして統合されました。

病院運営と現状

一般病床三三〇床、精神科一〇〇床、感染病床四床の計四三四床で運営しており、その内三十二床は地元医師会員のための開放病床です。目玉の美容外科を含めて診療科目は二十三科です。

職員は臨時も含めて約五〇〇人。病院の基本理念・基本方針として、能登全域の医療を守る中核病院としての使命感を持ちつつ患者本位の医療、医療水準の向上、高度な急性期医療、地域医療の推進、健全経営、働き甲斐のある職場の六項目を掲げ、BSC（バランスト・スコアカード）を通して職員一丸となってその目標達成に努力しています。患者の皆様に対しては、医療の安全管理、納得の医療が受けられること、医療の発展と医師とのパートナーシップの推進、プライバシーの保護に努めている姿勢を表明しております。

病院経営としては、平成十九年より地方公営企業法の全部適用とし、病院事業管理者を置くことで、今まで以上に経営責任を明確にするとともに、企業としての機動性を確保し弾力的な経営で健全化に努めており、その努力が実りつつあるところです。平成二十年七月からはDPC対象病院となりました。

当院は急性期型病院として運営し、平成十二年にはヘリポートを備えた能登唯一の三次救命救急センターの指定を受けております。平均在院日数は一般病床では十五日前後、精神科では一〇〇日前後となっています。救命救急センターを柱に、六十四列マルチスライスCTや各種核医学検査、ライナックなど最先端の医療機器と技術を擁して、脳や心臓の血管障害、悪性の疾患の診断と治療に力を入れるほか、NSTや嚥下障害、口腔ケアなどのチーム医療にも熱心に取り組んでいます。健診センターが併設されており、一方、居宅介護支援事業所の指定を受け、在宅医療も行なっています。精神センターでは、能登中部老人性認知症疾患センターの役割を担うとともに、グループホームも運営して、精神保険福祉の能登半島における中心的役割を担っています。

病院運営にはオーダリングシステムに加えPACSを導入して、次年度の電子カルテ導入のステップとしています。地域連携室を通して地域連携を推進する中、地元の医師会員の方々には、開放病床の運営に参加していただき、一〇〇％を超える利用率となっています。また病診連携のみならず、病病連携も視野に入れて、土曜の小児地域連携夜間診療や脳外科の輪番制、能登北部の病院への精神科医や皮膚科医の派遣を行ない、能登の中核病院としての使命を積極的に果たそうと努めています。教育面では、新人看護師、中堅看護師、認定看護師の教育・育成に力を注いでいる他、臨床研修指定病院として毎年四～五名の研修医を受け入れ、若いドクターの育成にも病院を挙げて取り組んでいます。また平成十年より病院機能評価の認定を継続しており、本年度は三回目の受審で、その結果を待っているところです。

実績として、平成十九年度は、外来患者二十五万二千人、一日平均一、〇三一人（石川県最多）、その内救命救急センター外来の患者数は一万八千人一日平均五十一人でした。入院患者は、十二万人で、一日平均三二七人、病床利用率は一般で八四％、全体で七九・五％でした。収支は一億六千万の赤字でしたが十八年度に比較して五・三億、十七年度と比較して十二・五億円もの赤字幅の圧縮に成功しています。総務省が打ち出した公立病院改革プランに先立って当院は平成十八年度より独自の経営改革シナリオに沿って改革を進めた結果、目標の三年目の単年度黒字が現実のものとなりつつあります。川口事業管理者を筆頭に職員全員の奮闘の賜物と思われます。

以上、病院の概要を紹介させていただきました。

（院長　藤岡　正彦　記）

福井県済生会病院

済生会小史

済生会は明治四十四年五月三十日、明治天皇の済生勅語により創立されて以来、その「済生」の心を受け継ぎ、現在は寛仁親王殿下を総裁に戴き、東京に本部、四十一都道府県に支部を置き、職員数は全国で約四五、〇〇〇人、三五〇余りの施設が保健・医療・福祉の充実、発展に必要な諸事業に取り組んでおります。

これまでの歩み

当院は、昭和十六年八月、済生会創立三十周年を機に内科の福井診療所として開設されました。その後、戦災・震災と幾多の苦難に見舞われますが、済生会支部と市民の協力によって二十四年四月に復旧工事を終え、外科を新設して再開し、さらに二十五年九月には増改築工事を完了して産婦人科を新設し、福井県済生会病院と改称しました。

旧病院は福井市中央部にあり、福井駅から徒歩五分という比較的恵まれた立地条件の下で、患者数も年々増加し四十二年四月には新本館の増改築工事に着手し、四十九年四月には救急センターを建設しました。また、五十二年当時最先端医療機器であったCTスキャンを全国で二番目に導入したのを契機に、中央放射線診断部を設置し、今日の開放型病棟システム・センターシステムの基礎を構築することができました。

こうして、五十七年四月一日、多年の願望であった総合病院（十三診療科・三九〇床）としての承認を得る事ができました。

移転新築

現有地での診療体制の拡充は限界に達したとの判断に基づき、平成元年に全面移転計画の推進を図るための建設委員会が設置され、二年二月の支部評議員会において建設事業計画および継続費予算が議決、同年十一月に用地造成工事に着手、五年五月に福井市東部地区（福井市和田中町）に念願の新病院の全面移転新築事業が完了しました。

完成した新病院には、当時モデル事業であった開放型病棟が設置され、さらに診療機能の充実を図るためのセンター制を取り入れ、質の高い診断・治療ができる診療体制の構築とともに、それらを支えるコンピュータシステムとして、オーダリングシステムを導入し病院機能の効率化を達成することができました。

新病院開設後は、地域住民のニーズに応えるべく七年には放射線治療棟の新築、十年には緩和ケア病棟（ホスピス）の新築、また十六年には東館の新築と外来再編工事のほか、電子カルテの導入、七対一看護配置の実施、DPC対象病院など医療環境の整備を図っていく一方、臨床研修指定病院・災害拠点病院・地域医療支援病院の指定を受けるなど、地域の基幹病院として県民の幅広い信頼を得るまでになりました。

現在は、敷地面積四三、〇八九・九七㎡、延床面積五七、九七六・六八㎡、許可病床数四六六床、診療科目二十一科の公的医療機関として、医療体制の充実に取り組んでいるところであります。

患者さんの立場で考える

当院では『患者さんの立場で考える』という基本理念を掲げております。一方的に与える医療ではなく、患者さんの気持ちになり、どういう医療・サービスが求められているのかを考え、行動することが真のホスピタリティーにつながると考えるからです。

患者さんに求められる医療として目指しているのは「地域完結型医療」です。済生会病院がすべてを診るのではなく、各医療機関が特化した専門機能を持ちながら、有機的に連携することが必要となります。

その一環として、当院では地域がん診療拠点病院として、検診から緩和ケアまでがんの包括的診療に力を入れるとともに、心疾患や脳卒中など急性期医療にも二十四時間三六五日体制で対応しています。

さらに、個々の経年的なデータを活用し、受診者一人ひとりに合ったテーラーメイド指導など健診機能を充実させた予防医療に積極的に取り組んでいます。

また、医療・サービスの質を高めるには、それを担う職員の質も問われます。当院では人づくりの一環として、ISOやワークアウト、バランスト・スコアカードなどのマネージメント・ツールを取り入れ、実践の中から組織のパワーを生み出しています。

『患者さんの立場で考える』。この思いは、福井県済生会病院の目指すベクトルを示すとともに、全職員の原動力にもなっています。

（院長　三浦　將司　記）

教室だより

循環医科学・血液情報統御学
（旧臨床検査医学）

本教室は、一九五九年に設立された金沢大学医学部附属病院検査部と密接な関係にあります。一九八六年に臨床検査医学が設置され、検査部の専任教授であった松原藤継先生（現名誉教授）が初代教授となり、一九九一年から助教授であった橋本琢磨先生（現名誉教授）が二代目教授となりました。二〇〇一年に、大学院医学系研究科・循環医科学専攻・血液情報学・血液情報統御学と改称されました。二〇〇七年九月より和田隆志先生が三代目教授に着任されております。二〇〇八年四月より、藤田信一先生の保健学類教授ご就任に伴い、酒井佳夫が准教授に着任しております。また、本年四月より、金沢大学の三学域十六学類への改組に伴い、医薬保健研究域医学系血液情報統御学となっております。

研究活動は、これまでに、腎臓病の発症・進展機序解明、腎保護・修復・再生への取組み、fibrocyteと腎臓病、ならびに多臓器傷害との関連について研究を行ってきました。腎臓病に関するこれらの病態解析の研究成果に基づき、新たな臨床検査医学創出を視野にいれ、以下のような研究を行っています。

一．多臓器間ネットワークの機序解明と新規バイオマーカー開発

これまで、腎臓病ならびに腎臓病と関連する心臓病はじめ、多臓器障害機序の解明を行って参りました。ケモカインに代表される液性因子ならびに骨髄由来細胞からのアプローチを試みています。特にケモカイン発現をパネル化し、モニタリングすることにより、臨床的に腎臓病の活動性や病態を反映する臨床的バイオマーカーの開発につながる可能性があります。さらにこの方法は、腎臓病にとどまらず、種々の検査や治療の安全性・有効性の評価、多臓器不全等の病態の活動性評価等に広く臨床応用が可能であると考えています。加えて、fibrocyteに代表される骨髄由来細胞が腎臓病と心臓病をはじめ多臓器間ネットワークに関与することを推測しています。また、網羅的に遺伝子・蛋白発現を解析することにより、臨床現場への応用を目指し、新規バイオマーカーを探索しています。

二．腎コロボーマ症候群の遺伝子診断法

腎コロボーマ症候群は、眼ならびに腎臓病を伴うまれな遺伝性疾患で、これまで世界で数十例の報告があるものの、本邦での報告はわずかであり、かつ腎病理を検討しえた報告はさらに稀です。これまでに、眼科学教室と共同で簡便な遺伝子診断法を樹立し、確定診断に用いています。原因不明な腎不全例を中心に、この診断法を臨床応用し、臨床病態のさらなる解明を目指しています。

三．貧血に関連する新規阻害因子と臨床検査診断法への応用

膠原病を背景とした貧血を呈する症例から、貧血・造血との関連が示唆される新たな阻害因子の存在を示す知見を得ています。この新規阻害因子について、その生物活性の意義を検討するとともに、臨床応用を目指した測定系の開発と臨床応用に取り組んでいます。

四．血液細胞の遺伝子発現解析による消化器癌の病態解析

消化器癌領域では、血液を用いた新たな診断ツールの開発を目指して、C型肝硬変における肝癌患者の末梢血液細胞の包括的遺伝子発現解析を行っています。この研究では、C型肝硬変患者の末梢血液単核球細胞の遺伝子発現プロファイルが肝癌局所における炎症細胞浸潤の遺伝子発現プロファイルと類似することを見出しており、血液細胞の遺伝子発現解析が、癌の病態解析および診断方法につながる可能性があると考え、さらに検討をすすめています。

診療における特徴は、和田隆志教授が附属病院検査部長および腎臓内科長を兼任され、実地臨床における診療、教育にあたり、検査部、血液浄化療法部とも力をあわせ、一層密接な関係を発展させています。酒井佳夫は消化器内科の診療に従事しております。患者さんの主訴からはじまり、引き続く検査等の臨床検査情報の収集、問題点の抽出、診療計画、治療と、医療全体を常に見ながらの診療への参加を目指し、関連する各診療科ならびに中央診療施設と協力し本院の医療に貢献しています。

教育では、医学類（医学部）四年生での履修科目〝臨床検査医学実習〟〝感染症〟の講義を、学内外の先生方の御協力のもと担当させて頂いております。また、医学類五年生でのBed Side Learningでは、循環器、感染症、検尿、採血等を、六年生でのクリニカル・クラークシップにおいて、各種超音波検査を含めて五年生でのBed Side Learningでの実習をさらに発展させた実地臨床に即した臨床検査医学実習を行っています。これらの実習では、実際の検査部の様々な業務現場に触れることが可能です。検査部での業務は、病院の全診療科からの検体が集中して処理されるため、医学生にとって、診療の全体像を垣間見る絶好の機会であると考えております。

臨床では、非浸襲的な早期診断と疾患活動性評価をはじめ、鋭敏なバイオマーカーの開発と臨床応用が求められています。血液情報統御学（旧臨床検査医学）は、臨床医学と基礎医学の架け橋となる医学分野に位置づけられ、一．新規疾患・病態の解明、二．新規の臨床検査診断法の開発とその日常臨床への応用・還元、三．治療への貢献と臨床エビデンスの構築、の三つを基本方針として取り組んでいます。それには実地臨床に携わる臨床家の視点と検査開発の基礎的な視点の双方をバランスよく交互にフィードバックさせる姿勢が必要です。また、この研究分野は比較的自由度の高い研究が可能であることが大きな魅力です。臨床医としての確かな目を養う症例検討会はもちろん、定期的なリサーチミーティングを活発に行っています。さらに、学生、研修医も含めて輪読会、抄読会も開いています。これらをもとに、臨床、研究、教育の視点から、臨床医学を基盤とした新しい臨床検査医学の創出を目指し、微力ながら、金沢大学からの医学の発展の一助となることを目指していきたいと考えています。十全同窓会の諸先生方におかれましては今後とも益々の御指導・御鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

（酒井　佳夫　記）

運動生体管理学

当研究室は、一九九六年四月に金沢大学医学部・医学科・国際医療保健学講座として発足いたしました。二〇〇一年四月には同大学院医学系研究科・環境医科学専攻・環境社会医学講座・運動生体管理学研究分野となり、現在に至っております。

立位姿勢保持と直立二足歩行の獲得は、ヒトの進化を方向づけた重要な機能です。生活習慣病に深く関わる生活様式や運動様式を理解する上で、またヒト特有の病気や健康問題を理解する上で、立位姿勢と歩行の制御様式や生理機能の研究は極めて重要であると考えられます。これまで随意運動と姿勢制御、姿勢と中枢神経系の賦活、運動制御における姿勢保持の役割、立位位置の知覚、各種体力について、発達と老化を加味して研究を進めてまいりました。それらの研究テーマで学位取得者を毎年輩出しております。海外との共同研究も継続しており、本年度は外国人特別研究員（欧米短期）事業としてアメリカの若手研究者を迎えての研究も実施できました。また、平成十七―十九年度の「頚部前屈姿勢と周期性運動の脳賦活作用」（基盤研究Ａ）を契機に、全国レベルでの共同研究を展開しています。以下に、当研究室で扱っている主な研究テーマを紹介します。

１　上肢屈曲運動時の予測的姿勢制御

前方への上肢屈曲運動時に、上肢運動の主動筋（局所筋）に対して下肢や体幹の姿勢調節に関わる筋（姿勢筋）の活動が先行して開始することが報告されています。この姿勢筋活動は、上肢運動による姿勢および平衡の乱れを予測し、それに抗するように、中枢でプレプログラムされた証拠であると考えられています。この予測的姿勢制御における脳内制御過程を検討するために、誘発脳電位や事象関連脳電位の記録を行っています。高齢者では、開発したバランスボードによる平衡機能訓練によって、上肢屈曲運動時の予測的姿勢制御に変化が生じることや、脳の高次機能である認知機能を改善できることを明らかにしました。さらに、注意分散の影響がその予測的姿勢制御に影響を及ぼすことが明らかにされてきています。姿勢外乱時の自動的な姿勢制御において、腰部への負担が大きい姿勢運動様式があることが明らかになってきました。これに関連して、腰痛発症を防止するための日常生活での動作指導法を検討しております。

２　床振動時の予測的姿勢制御

歩行運動や走行運動などの移動を伴う状況下では、動的姿勢制御が重要になります。そこで、立位で一定周期の床振動を負荷した場合の予測的姿勢制御について検討を重ねています。一連の研究を通じて、反復床振動時の平衡機能の適応能を評価する方法を確立し、これを用いて予測的姿勢制御の学習効果が男子では六歳以降で認められ、女子では一歳早い五歳以降で認められるという性差を明らかにしました。高齢者では、約十五％の被験者で学習が進まないという結果が得られ、それらの高齢者では脳ＭＲＩ画像診断によって橋・小脳の萎縮、小脳、基底核、視床の梗塞、大脳皮質深層部の動脈硬化性変性が有意に多く認められました。床振動を反復負荷することで、予測的姿勢制御は下位の中枢に移行し自動的になされ、上位中枢では姿勢制御に直接的には関係のない情報の処理や他の運動の並行が可能になると推察されます。これについては、姿勢制御に有用な視覚情報をシャッターメガネを用いて短時間（約四〇ms）与え、その時の視覚誘発脳電位を測定する新手法を開発するなどして研究の新展開をはかっています。

３　頚背部筋の筋緊張による中枢神経系の賦活

運動を素早く開始したり、動く視対象を早期に捉えようとする場合などに、膝関節、股関節、および足関節を軽く屈曲し、頚部および体幹を軽く前屈した姿勢（基本的動的姿勢）がみられます。この構え姿勢の生理学的意義の一つとして中枢神経系の賦活を考えています。頚部前屈姿勢の保持によって、光刺激を用いた眼球運動反応時間と視覚野に至るまでの視覚情報の処理時間が短縮し、中枢神経系が賦活されることが示唆されました。また、上肢屈曲運動時の姿勢筋の先行活動がより早く開始されるとの結果も得ています。高齢者では、若年成人に比べて、頚部前屈姿勢保持による眼球運動反応時間の短縮が得られにくく、中枢神経系の活動状態を状況に合わせて調整する能力の低下が示唆されています。頚部前屈姿勢で活動する僧帽筋に焦点を当てた研究では、眼球運動反応時間の短縮が、頚部を前屈させずに随意的に僧帽筋を収縮させた場合と僧帽筋に振動刺激を加えた場合に、同程度認められ、筋紡錘からの感覚情報が中枢神経系の賦活に関与していることが示唆されています。現在、この中枢神経系の賦活における脳内制御過程を検討するために、視覚と聴覚を用いた誘発脳電位、磁気刺激、局所脳血流量を用いて研究を進めています。

４　立位姿勢の位置知覚と感覚情報

同一個人が、安静立位姿勢を繰り返し保持した場合には、前後重心位置や筋活動が頻繁に変わることを明らかにしてきました。これは、安静立位姿勢の位置知覚能が低いことを示唆しています。若年成人を対象に、立位で様々な前後重心位置を保持させ、それを再現させたところ、安静立位姿勢に近く安定性の高い立位姿勢での位置知覚能が低く、転倒に転じる姿勢での位置知覚能が高いことが明らかにされました。最近では、下肢筋や足底の機械的受容器に各種の感覚刺激を加え、中枢神経系に形成されている感覚参照系の特性について、各種誘発脳電位を用いて検討を進めています。（藤原　勝夫　記）

支部だより

奈良支部

大変遅くなりましたが、本年度の奈良県支部同窓会開催につきご報告申し上げます。平成二十年六月二十一日（土）に奈良市内の菊水楼にて開催いたしました。今回は長年十全同窓会近畿支部合同同窓会にご参加を頂いている金沢大学法文学部卒業の板村丞二会員が特別に参加され、奈良県支部会員は九名が集いました。総会では橋本和夫会長の挨拶に始まり、会員数の報告の後、本年度より奈良県医師会議長に就任された西尾功会員から、今般の医療情勢や日本医師会の状況について説明があり、引き続き今後医療のあるべき姿について参加会員間で意見交換を行いました。また他大学に比しての金沢大学医学部卒業生の特質にも話が及びました。さらに増加しつつある医療訴訟の現状と問題点についても板村会員からお話を頂きました。一時間以上にも及ぶ活発な意見交換の後は席を移して懐石料理に一献傾けながら、さらに親睦をはかり解散しました。

平成二十年十月

（酒井　知昭　記）

写真説明

後列左より酒井知昭（昭和五十年卒業）、野々村昭孝（昭和四十六年卒業）、中村忍（昭和四十三年卒業）、木村弘（昭和五十三年卒業）、中川勝裕（昭和五十六年卒業）

前列左より土肥和紘（昭和四十三年卒業）、西尾功（昭和三十四年卒業）、板村丞二（法文学部卒業）、橋本和夫（昭和二十九年卒業）、坂上正義（昭和三十五年卒業）

長野支部

今年度の十全同窓会は、本部より十全同窓会会長佐藤保先生にお越しいただき、長野駅近くのホテルの最上階で行なわれました。参加者は佐藤会長を含めて十七名でした。総会では出席できなかった方の返信葉書に書かれている近況を御報告しています。その中には学生時代に佐藤保先生より教わった講義の内容を懐かしむ葉書もありました。多くの方々が現在、頑張っている報告でしたが、御高齢で診療を止めて引退された方も数人いました。お一人は、御逝去された旨を御家族から返信がありました。御冥福を祈り全員で黙祷をして、会議を始めています。協議では今年まで漠然としていた、十全同窓会会則を整理して会則を制定しています。また支部長として長年十全同窓会を引っ張っていただいた飯島勇三先生（昭和十八年卒業）を名誉支部長として、今後とも御指導をいただくということを議決しております。

佐藤保十全同窓会会長からは、大学の近況や三学域十六学類についての御説明をいただきました。その後各自より、学生時代の所属クラブや想い出話をしていただいております。上田市の小井土昭二先生（昭和十八年卒業）は医学部にサッカー部を初めて立ち上げたお話しを披露していただきました。信州大学第二内科教授として、御活躍の田中栄司先生からは、信州大学には、金沢大学出身の教授として画像医学（放射線科）の角谷真澄先生、人体構造学（解剖学）の森泉哲次先生、第一外科教授宮川眞一先生がいてそれぞれ御活躍されている旨のお話しと、信州大学の研修医制度の現況をお話しいただいております。ＪＡ厚生連長野松代総合病院の春日好雄副院長（昭和五十四年卒業）からは、地方の病院としての研修医や、医師の確保のための御苦労を話していただきました。佐藤同窓会会長の温厚なやさしい笑顔もあって、懇親会は瞬く間に時間が過ぎています。カメラを持参するのを忘れてしまい、酔いが回りすぎる前にホテルのスタジオでホロ酔いの少し気取った記念写真を撮り、その後更に懇親を深め同窓会を終えています。

（神村　盛宣　記）

静岡支部

去る八月三十日、十全同窓会静岡県支部総会が静岡グランドホテル中島屋において催されました。本部より佐藤保会長の御出席を頂き、会員二十名が集いました。集中豪雨が頻発しＪＲが時間通り動くか危惧しましたが、会長は予定通り来静され一同ほっとした次第です。静岡県は東西に長く東京大阪間のＪＲの三分の一に及びます。その為同窓会も東部の三島市、中部の静岡市、西部の浜松市と毎年持回りで開催、本年は静岡市で開かれた次第です。会員は現在一二〇名です。

総会は水野洋一静岡県支部長（昭和四十一年卒業）の挨拶にはじまり、亡くなられました津田進三先生（昭和二十三年卒業）、木俣公平先生（昭和十九年専卒業）、松本治先生（昭和二十七年卒業）への黙祷、そのあと佐藤先生よりお話し

をお聞きしました。中村信一先生の金沢大学学長御就任、医学部一五〇年記念事業、国家試験合格率、卒後臨床研修の現況などお伺いし、これまで続いてきた医学部並びに同窓会の独自の活動も金沢大学全体の大きなうねりの中にのみこまれていくような時代の変革が来つつあるように思えました。そのあと大先輩から若手の先生方まで時空を越えたスピーチが続き、一同大いに盛り上がりました。今年からの試みとして十全同窓会のホームページからダウンロードして得られた第四高等学校の寮歌を最長老の江上三義先生の音頭で力強く、つづいて、金沢大学校歌を声高らかに歌いました。特に校歌は初めてという先生方も大勢おられましたが、天うつなみではじまる室生犀星の作詞で文化都市金沢の香りが満ちあふれた、素晴らしい校歌でした。最後に次回開催の浜松市での再会を期し、散会しました。今年も若い先生の御参加があり、大変喜ばしいと思います。更に多くの先生方の御出席をと願っています。近いようで遠い静岡までお越し頂いた佐藤会長並びに事務局の山岸さんに感謝いたします。

なお、県支部長の水野先生が退任、後任に松田保秀先生（昭和四十三年卒業）が選ばれました。

出席者：江上三義、蜂谷徹、竹内正和、長林勝彦、鈴木幸男、中島康治、油井俊平、竹内健、水野洋一、松田保秀、佐野勉、佐野三枝子、土屋和弘、東茂樹、松下文昭、深澤洋幸、池谷直樹、小山澄美子、富松功光、望月康弘（敬称略）

（佐野　勉　記）

福井支部

平成二十年八月三十一日（日）第五十九回福井県支部総会が奥越支部の担当で勝山ニューホテルで開催されました。勝山は交通の便が悪いのでバスを用意させて頂きました。本部から来賓として、佐藤保十全同窓会長、古川俣十全同窓会理事長、特別講演講師として絹谷清剛がん医科学専攻バイオトレーサー診療学教授をお迎えし、福井県内からは四十三名の会員が参加されました。

開会の後、この一年間の物故会員十二名の方に黙祷を捧げました。来賓あいさつでは佐藤保先生・古川俣先生から母校の現状として学部の統合・医学部創立一五〇周年事業・金沢大学一五〇周年記念誌事業とそれにともなう金沢大学記念誌委員会の設立等についてお話がありました。又医学部附属病院は金沢大学附属病院と名称が変わるとのことであります。続いて山口明夫福井大学附属病院長の就任祝い、および傘寿会員十一名の表祝が行われた後、議事に入り丹尾太支部長欠席の為、代理として西浦幸男副支部長が会務報告、決算報告、会計予算案の議題を滞りなく終了しました。

総会に引き続き絹谷清剛教授による特別講演「ＰＥＴ：ＦＤＧとポストＦＤＧ」が行われました。記念撮影の後、恒例の懇親会が盛大に開催されました。アトラクションとして日本舞踊や地元の皆さんによる大日太鼓が披露され一同歓を尽くしました。次期開催支部福井支部会長松田尚武先生の御挨拶をいただき盛会のうちに閉会しました。

（佐々木　紘昭　記）

京都支部

十月二十五日（土）、今年は昭和三十六年卒業の松山均先生と平成四年卒業の息子さんの徹先生のお世話で、ホテルロイヤルヒル福知山にて開催されました。京都市内からは昭和二十九年卒業の中村晋先生、昭和三十八年卒業の八田一郎、昭和四十一年卒業の若泉悟先生、昭和四十九年卒業の桑原正喜先生、昭和五十三年卒業の小野聡先生、辻和夫先生、北部からは松山先生親子の他に平成六年卒業の深谷賢司先生の計九人の参加がありました。松茸料理も出て豪華な食事を味わいながらの近況報告で、松山徹先生はお父さんを継いで循環器内科の専門医としてがんばっておられ、お父さんの均先生は伝統俳句に励んでおられるご

様子。桑原正喜先生は今年から滋賀県の草津総合病院の院長に就任されました。そして、医療情勢の困難な中でこそ意欲を燃やし優秀な人材を求めてどこでも、そしてこの会にも参加しているのだと、聖路加病院のような病院にしたいと展望を語っておられるのを聞いて、参加者一同心が膨らむ思いでした。深谷健司先生は脳神経外科の専門医として綾部ルネス病院で脳、脊髄外科のマイクロサージャリーに励んでおられるようで、遠くからも患者さんが紹介されてくるようです。皆さんががんばっておられるのを聞いていると楽しくなります。

翌日は松山均先生ご夫妻の案内でマイクロバスに乗って元伊勢神宮に参拝しました。三重県の伊勢神宮のできる以前に、福知山の山の中に伊勢神宮があったなんて、まったく知りませんでした。内宮と外宮があり、五十鈴川があり「お伊勢さんの伊勢神宮とそっくりやな」とぼくが言うたびに松山先生は「そら、元伊勢やもん」と自慢しておられました。そのあと鬼で名高い大江山の「日本の鬼の交流博物館」を見学しました。元福知山の校長先生で金沢大学教育学部卒業の、我々の先輩でもある館長さんから口角泡を飛ばしての、熱い語りに、わたしたちはだんだん鬼の気持ちがわかってきました。お昼は、イタリアン・レストラン・OZですばらしい料理とイタリアワインを味わいながら、松山先生の伝統俳句の話に盛り上がりました。本当に楽しい二日間を松山先生ご一家の皆様のおかげで過ごさせていただき、感謝しつつ来年の京都市内での再会を約して帰路につきました。

（八田　一郎　記）

クラス会

三一会平成二十年度の会

十月十二日午後二時、長野市善光寺大本願に集合。善光寺上人第一二一世鷹司誓玉大僧正にお願いして、先に逝去された旧友二十七名の冥福を祈り、法要を行った。夕刻からホテルメトロポリタン長野において懇親会で歓談した。平均寿命より平均余命へ、話題は明るい方へ向いた。大半の会員が今年喜寿を迎えたが、法要される方が増えないようにと願っている。

来年の再会を約して解散した。

出席者（敬称略）

朝倉志良、桜井拓夫妻、富永淳夫妻、大野義彦夫妻、沢田大成夫妻、中浜俊次夫妻、小林好文、鈴木幸夫、米島作三郎夫妻、斉藤真夫妻、髙野利一郎夫妻、宮下清、崎川清秀夫妻、田中悌夫

（宮下　清　記）

さんご会（昭和三十五年卒業）

平成二十年十月十二日（日）静岡県富士市ホテルグランド富士で第四十六回さんご会総会が開催されました。大学のある北陸の地からアルプス、富士山を越えて遠方にもかかわらず、又、前日に富士山麓朝霧高原に着き朝霧カントリークラブに泊まり早朝スタートしたゴルフ組九名も加わり総勢四十六名の参加を得まして盛大な会となった。

当地で開業の中島による歓迎の挨拶があり、この一年間物故者は一名も無かったのですが、米国移住の奥野隆君が二〇〇〇年七月肺がんで逝去されたとの便りがあり、全員彼の御冥福を祈り黙禱を捧げた。

続いて会務の報告も兼ねて、佐藤保君（現・金沢大学十全同窓会会長、名誉教授）に十全同窓会、大学医学部の近況について講演して頂きました。次に雨天の時には写真でだけでも見て貰おうと企画しました空撮写真家（富士RC会員）磯西昭様による「富士山と世界遺産」と題する講演を拝聴しました。現在世界遺産候補に一歩前進したとはいえ、自然環境に配慮した山小屋の整備、トイレ・ゴミの垂れ流し等解決すべき多くの課題がある事を示し、日本一の山に相応しい、恥ずかしくない遺産として後世に残して行きたいという強いメッセージのある話で一同大いに感銘を受けた。

宴会は前回幹事の石政喜弘君の乾杯の音頭にて始まりました。

各自の近況報告の中で、特記すべきこと二～三申し上げますと、卒業して間もなく米国に渡り、この会には初参加という和嶋毅君（現・米国テキサス大学内科、名誉教授）が特別スピーチしてくれました。現在米国の医療保険事情の問題が多く大統領選挙の争点の一つになっている事、若き医師達にボランティアとして血液学、腫瘍学を教え研究指導している事、ここ一ヶ月での急激な円高・ドル安で戸惑っている事など、二次会最後ま

で歓談していた姿が印象的でした。彼の口もとに学生時代の面影があり、心配する事は無かった。

又、昨年大病で倒れて、暫く療養していた梅田俊彦君が顔の色艶も良く御夫人と一緒に元気に出席して下さり、しかも一時佐藤君に預けたこの会の会務を再び引き受けても良いという発言に、一同感激大きな拍手が送られた。

この一年間、大きな社会問題即ち、年金、後期高齢者医療、医師不足、医業継承、メタボ対策など、我々世代には、いささか刺激的過ぎる環境の中、最近の株の暴落、円・ドル為替の急変、経済不況など、医療費二、二〇〇億円削減など影が薄くなる位、身にかかる話題も多々あり、二次会まで持ち込んでの話は中々尽きなかった。

宴会最後には、全員起立して、寮歌「南下軍」「北の都」を斉唱。それぞれ長い旅路の果てに、再び金沢ふるさとに帰って来て、若きエネルギーを貰った様な感動を覚えました。

翌日の観光は行楽日和に恵まれ、東名富士インターより御殿場へ、乙女峠で富士山を眺め芒の原が波打つ仙石原にポーラ美術館を訪ねて日本の近代絵画ばかりでなく、それに影響を与えたヨーロッパの名画などを鑑賞、平等院を模したという龍宮殿で昼食、箱庭にボートを浮かべている様な芦ノ湖を展望しながら、午後三時無事に三島駅に着きました。

来年は横山鉄夫君が主催して長野県諏訪湖、その翌年は卒業五十周年という大きな節目を迎える予定、これからは御夫人方と一緒に会が益々発展していくであろう事を念じながら、来年の再会を約して散会した。

深秋の
富士の裾野へ　旅鞄

富士指呼に
風の芒と　なりにけり
牧子（松山夫人）

色鳥来
仙石原の　美術館

すっきりと
富士置く朝（あした）　松手入
ひとし（松山均）

文中に記載された以外の参加会員。（敬称略、順不同）

石政夫人、松原夫妻、榎夫妻、風間夫妻、熊谷夫妻、越上夫妻、佐藤夫人、摂津夫妻、篁夫妻、布谷夫妻、水村夫妻、和嶋夫人、内山、内波、木南、坂上、塩之谷、蘇原、筑田、中山、野田、半田、村田、横田、横浜、天羽、藤井、中島夫人

（中島　康治　記）

四十会イン金沢
（昭和四十年三月金沢大学医学部卒業生同窓会）

本会は、大学を卒業後、相互の近況を報告したり、情報を交換したりする親睦会として始められた。当初、会はほぼ四年に一度のペースで不規則に開催されてきたが、全員が還暦を迎えるようになってからは毎年開かれることになった。会は、四年に一度は金沢市で、残りは北陸三県のほか関西、関東でも開かれてきている。会の世話役は、当初、故、畷氏が勤め、現在は斉藤健二氏が担当している。単に親睦会であるので、とくに、何かを働きかけたり、何かを行うというような活動はないが、これまで、会員諸氏の近況あるいは思い出集として、「四半世紀の軌跡」、「四十年の軌跡」と題し、記念誌が二回発行されている。卒業時七十九名いた会員も、これまで八名を亡くし、現在七十一名である。

今年度は、十一月八日、金沢で開かれることになり、土原一弘（主）、佐々木誠、藤田秀春、私、藤本啓太郎（ゴルフ）の五人が幹事となって準備が進められてきた。会場は卯辰山の松魚亭で、今回の出席者は三十六名であった。

会は土原氏の司会のもと、藤田氏の開会の辞、斉藤常任幹事の挨拶で始まり、金沢の旬の魚料理を食しながら、団欒の場となり、その後、参加者全員から時間の関係から一人一分間の制限時間で近況報告を頂いた。しかし、何人かはやはり懐かしいのであろう制限時間を越えて最長五分三〇秒も話をするものもいたが、話の内容は、懐かしい思い出話やら、現在活躍中のことやら、自分や自分の家族のことなど、興味深いものばかりであった。会場の受付は料亭の二階で行われ、受付のところから、会員が階段を上がって来る姿をみていると、全員がすでに古希になる年頃になったことは隠し切れず、その風貌、足取りにはやはり年老いた様子が見られたが、しかし、酒が少し入り、団欒が始まると、若かりし昔の元気な姿を見せてくれていた。最後に、次年度の会は、京都市で開くことが決められ、次の再開を誓い、声高らかに万歳を三唱して、中締めとなった。そうして、それぞれの仲間とともに東や片町の夜に散っていった。

翌日は遠方から来た会員を中心に東の料亭で昼食を取る金沢めぐりが開かれ、変貌しつつある金沢を楽しんだようである。一方、同好の会員によるゴルフコンペが片山津ゴルフ場白山コースで行われ、岩城氏が優勝し、BGは平丸氏の九二であった。

今回の幹事長であった土原氏のご苦労に感謝し、加齢によって会の参加者が減少してきているが、次の京都では、多くの会員の元気な姿での再会を期待したい。

（永川　宅和　記）

医学部百五十年史のための覚え書【24】

石川県金沢病院医学所の新築寄付願

寺畑喜朔

☆金沢病院は明治十二年六月、医学所の後方、殿町の松平大弐邸跡（現ＮＨＫ金沢局）に新築落成した。病院の旧建物は以後医学所が使用し、経費も医学所と病院に分離して執行された。

明治八年六月、医学館は石川県に移管され、七月にスロイスの後任としてホルトルマンが着任した。医学館は同時に病院機能を兼ねることになる。翌年八月石川県は石川県病院から石川県医学所を分離させた。同年十月石川県富山分院（田中信吾兼務）、石川県福井病院（院長馬嶋健吉）を置き、両院に医学所を併設した。明治十年二月富山分院を石川県富山病院、福井分院を石川県福井病院、また本院の石川県病院を石川県金沢病院にそれぞれ改称した。

金沢病院は機能充実を目指し、病院の新築が急務となり、病院長大田美濃里は各町村に醵金の募集を行った。本学百年史発刊以後につぎに示す寄付願の原本を入手したので、史料として提供する。

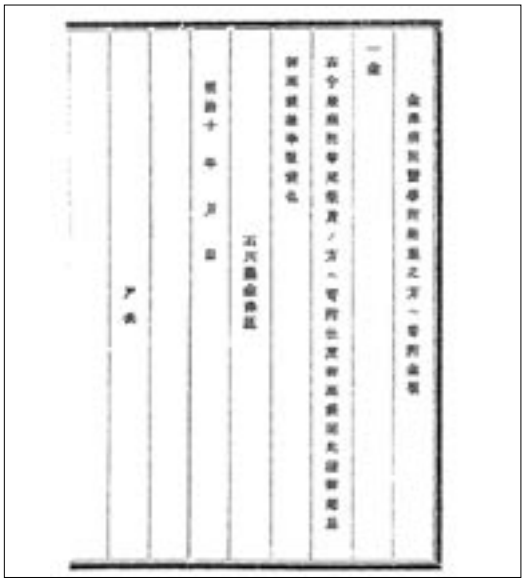


図１

図２

図３

金沢大学（医学部）開学の起点について

寺畑喜朔

昭和三十二年十一月十二日長崎大学医学部は蘭医ポンペが来日し医学教育を開始した年を記念して「西洋医学教育発祥」百年祭を開催した（記念史の発刊は昭和三十六年三月）。翌三十三年五月七日東京大学医学部は「お玉ヶ池種痘所で西洋医学教育を開始した―安政五年五月七日」を記念して百年祭を挙行した（記念史は昭和四十二年五月）。

この二大学の百年祭の開催に触発されて、金沢大学医学部では故倉知与志教授が主導して、百年祭開催のために必要な史料収集が開始された（兵地富太郎技官が担当）。ところで、百年の起点については、同教授の手元にあった「石川県金沢病院沿革」（高安右人病院長から渡瀬政礼金沢市長へ貸与提出された）の前文に金沢藩医らの要請を受けて文久二年三月に種痘所（それ以前は堤町に私立種痘所あり）を開所したとあり、審議記録は未見であるが、この史実が以後慣用になり、彦三・八番丁の種痘所の開所をもって金沢大学医学部の起点となった。したがって一つの正式機関名としては※「金沢藩種痘所」もしくは「金沢藩彦三種痘所」のいずれかが妥当であろう。

つぎに「石川県金沢病院沿革」の前文を示す。

石川懸金澤病院沿革

抑本院ハ安政年間金澤ノ醫師津田淳三今村兎朔田中大玄島崎元鼎津田随分齋伏田元幹田中兵庫土岐雄吉遠藤三六等ノ九名其當時種痘ノ普及センコトヲ謀リ相共ニ協力シ金澤堤町某ノ持家ヲ借リ私立ノ種痘所ヲ設置シタルヲ以テ基因トス蓋シ之ヨリ種痘ヲ受ル為メ来所スルモノ日ニ月に増加セリ茲ニ於テ衆員思フニ病院ナルモノヲ創設シ一般患者ヲ療養セバ大ニ利スル處アルベシト然リ然レ共之カ設立ハ多額ノ資金ヲ要スルヲ以テ先ツ金澤藩醫太田美農里黒川良安高峯元稜等ニ謀リタル末藩廳ニ請フニ種痘所ノ諸費悉皆ヲ藩ヨリ支辨セラレンコトヲ尤モ之ニ從事スル醫師ハ無給トシ其種痘所へ収納スル處ノ謝金ハ總テ蓄積シ漸次病院設立ノ資本ト為サンコトヲ以テス藩廳幸ヒニ之を許可セリ依之文久二年三月金澤彦三八番丁ノ反求舎ナル建物ヲ附與セラレ謝金取扱ノ吏員並使丁迫給與セラル此際醫師黒川良安高峯元稜鈴木儀六奥田宗範大窪大禧大熊春吉明石春丈嵯峨壽安崎田春庵三宅良雄明石君中池田一安阪本槙藤田弘庵島崎元恭増尾法教等又加ハル茲ニ至テ種痘大ニ行ハレ種痘所ノ建家狭隘ヲ告クルニ至レリ茲ニ於テ止ムナク又藩廳ニ請フテ建物ノ廣大ナル金澤南町ノ心學所ニ移轉ス實ニ元治元年某月ナリ爾来種痘愈々盛大ニ赴キ遠近踵ヲ接シテ至ル而シテ慶應三年某月ニ至リ藩主特ニ病院ヲ創設センコトヲ命ス同年六月遂ニ卯辰山（金澤城ノ東北ニ在リ）ヲ開拓シ之ニ建築スルコトニ決セリ諸民之ヲ聞キ大ニ感喜シ競フテ工事ヲ補助シ同年十月ニ至リ終ニ落成ヲ告グ而シテ之ヲ養生所ト名ヅク

※註（古川　仭　記）

いわゆる「加賀藩」及び「加賀藩種痘所」の呼称について

江戸幕府下では行政単位としての「藩」という呼称はない。当時は「領知」もしくは「知行所」であり、「藩」と言うよりも「領」が公称であった（大名領国制）。幕府領（幕領）＝天領、大名領＝尾張領、島津領などである。明治維新後、幕府の領地であった天領を「府・県」と名前を変えて地方行政地にし、旧大名領を「藩」とした。「版籍奉還」（明治二年六月十七日）による「府・藩・懸三治制度」である。このとき、いわゆる「加賀の国」前田領は「金澤藩」と「大聖寺藩」に二分されたが、廃藩置県（明治四年七月十四日旧暦）後、「石川県」に統一された。したがって加賀藩という行政単位は制度上、存在しない。

一般に江戸幕府の体制を称して「幕藩体制」と言われるのは、将軍と大名という封建的主従関係を基本にとらえた歴史学上の概念である。実際に「藩」という呼称が登場するのは江戸時代中期からで、漢学者たちが、中国において皇帝から領地を与えられた諸侯を「藩王」、「藩鎮」といったのに習って、日本の大名領を「藩」と呼ぶようになった。ちなみに新井白石が一七〇二年（元禄十五）徳川家宣の命で諸大名の事跡を著した「藩翰（かん）譜、または藩川（せん）譜」は「藩」の用例としては早いものである。

本文で引用されている、「石川懸金沢病院沿革」の前文では「金澤藩医」、または「金澤藩廳」と記載されている。一方、良く引用される「旧藩学校沿革調について」（明治十六年作）では、「旧加賀藩立壮猶館」、「旧加賀藩立医学校」とある。このように「藩」の使用法はまちまちであり、現在、「加賀藩」という呼称が一般的なのは、後世のひとが便宜上用いた俗称の定着化がその理由の一つに考えられる。

医学展を終えて

二年ぶりの医学展が終わり、早二ヵ月。本格的な冬を向えましたが、十全同窓会の先生方におかれましてはご壮健にてお過ごしのこととお喜び申し上げます。

まず、諸先生方のご協力ならびに十全同窓会のご支援をいただきましたことを医学展実行委員会一同深く感謝申し上げます。

二〇〇八年医学展は前回の「十五年ぶりの復活」といったような、印象的なキャッチコピーを使えずに、一昨年より内容の充実を図ったものの広報活動に大変苦労いたしました。それをカバーするために、第一内科の「チームダイエット」の先生方の協力を仰いで開発した、サークルKサンクスの「よくバランス弁当」の企画や、金沢市民の血圧を測って〝二十四時間以内に一箇所で測った測定者数の世界記録〟を更新しようという「血圧ギネス」という企画などを広告材料として取り上げていただくことで広報活動に成功いたしました。

その結果、来場者数は四、五〇〇人を超え、大変盛況な医学展となりました。この来場者の中には、かつての医学展をご存知の方もおられ、遠方では神奈川から来られた方もいたほどです。広告活動の成功の結果と思っていた来場者数ではありますが、実は影には先生方がかつて三万人を動員するほどの医学展を行われていたことの影響や金沢大学の伝統が深くかかわっているのだなと肌を持って感じました。

現在の医学展では、かつてとは少し趣が異なり、個人情報の関係等で実際の標本展示というものが大変困難な状況にあります。その結果、学生は大変真剣に取り組んでいるのですが、来場者の方々（特にかつての医学展を知る方）にとっては少し物足りないという感想をもたれるようでした。次回の医学展ではこれらの意見を如何に反映してより充実した医学展とするかが課題となりそうです。

医学展実行委員会では、現在の二年毎の開催を改めて、毎年の開催にしても良いのではないかという話し合いをしております。その際には来年度も先生方のお力をお借りすることになると思いますが、ご支援とご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

（医学展実行委員長　医学科五年　濱屋　圭　記）

医学展に参加して……

一昨年の医学展（十五年ぶり）に続き、本年も第二回医学展が開催されました。今回も学生たちが中心となり、さまざまな方面に及ぶ準備と実施に一生懸命打ち込んでいました。企画も、ギネス企画、医学企画、一般企画、サークル企画、模擬店企画、ステージ企画などが実施され、たくさんの老若男女の皆さんに楽しんでいただけたようです。結果として大成功裏に終わった医学展ですが、やはり学生たちの間に「やる気」のギャップがあるようです。何度か相談に乗っているうちに、「なかなか学生が参加してくれない」との実行委員の言葉につい反応して、「じゃ、うちの教室（細菌学）から企画を出す！」ということになり、細菌学の講義・実習が終わったばかりの三年生に声をかけ、頼もしい有志八人が参加してくれて「バイキンマンプロジェクト」を学生・教員のコラボ企画として行いました。ヒトがいかにバイキン（細菌）にまみれているかを、展示・体験（手指の細菌の培養など）を通して知ってもらう一般向けの企画でしたが、教室の専門的ノウハウと学生のやる気・元気が合体し、多数の来場者に楽しんでもらえたようです（体力的に疲れましたが…）。

もし、これからの医学展で医学部らしい企画が減っていくようであれば、研究室と学生の共同企画も来場者の皆さんにはとても魅力的なのではないでしょうか？今後の医学展では、もっと学生諸君からいろいろな研究室の扉をたたいてみて、楽しくてためになる医学企画の可能性を探ってみて欲しいと思います。

（学生支援委員会委員長　清水　徹　記）

学生コーナー

西医体報告

第六十回西日本医科学生総合体育大会は、主管中国・四国ブロック、代表主管校広島大学の運営のもと、平成二十年七月三十一日から八月十五日の十六日間に亘って開催されました。開催地が広島であり、平和記念式典と同時期に行われるため運営が非常に困難であると予想されるなか、無事終了いたしました。

今大会における金沢大学の成績は参加大学四十四大学中総合四位と昨年の二十七位から大きく順位を上げました。

参加選手は結果だけでなく、西医体までの過程を通して大変貴重な経験をすることができたと思います。このような経験も十全同窓会の先生方のご支援あってのことであり、この場をお借りしまして、ご支援いただきました関係者各位に厚く御礼申し上げます。

来年度は琉球大学が代表主管校であり、沖縄で初めて西医体が開催されます。

何かと大変ではございますが、選手個人個人が精一杯頑張っていきたいと思いますので、今後ともご支援のほどよろしくお願いします。

各部の主な成績

準優勝　弓道、スキー男

三　位　バドミントン男、陸上競技男

ベスト8　ソフトテニス男、ラグビー

（第六十回西医体評議委員　四年　蒲田　亮介　記）

白山診療班

金沢大学白山診療班では、白山室堂内での診療所において登山客と室堂スタッフへの診察ボランティア活動を五十年以上の間行なってきています。診療活動は医師である正班員の先生方が行い、副班員である医学生は医師の補助、清掃、スケジュールや物品の管理、厨房のお手伝いなどを行なっております。本年度は七月下旬から八月末までの間に約一六一名（男性八十六名、女性七十五名）程の患者さんの診察を行いましたが重症例はほとんどなく夏山での活動を終えることができました。

学生の立場から診療班のよさを三点紹介したいと思います。まず一つめは、医療現場に直接関わることができることです。「白山診療班は地域医療の原点である」という声を何度も耳にしました。学生でもできる範囲での診療活動を経験し、直接関わることで多くのことを学び、また医学への関心とモチベーションを高めてくれる場所でもあると思います。

二つめは雄大な自然に接することができることです。眼下に広がる雲海、下界では見られない高山植物、夜の輝く星空、そして山頂から拝むご来光を見ると心が洗われるような気持ちになります。

そして三つめは各方面の方々と交流できることだと思います。普段はせまい世界にいる我々ですが様々な立場で夏山に関わっている方々と触れ合うことで日常では気が付かないことに気付かせてもらったりします。先生方と診療所で生活をともにする中で貴重なお話を聞かせていただけることもよい経験になります。また学生同士でも初対面の人達が不思議なくらいに親しくなれます。これも山の魅力の一つではないかと思います。

このような貴重な活動に参加させていただき感謝するとともに、これからも活動を続けて参りたいと考えております。お蔭様で今年度も無事に活動を終えることができました。診察にあたられた先生方、本当にありがとうございました。また白山観光協会の方々をはじめとしてご協力いただいた関係各位、援助やご協力を頂いております十全同窓会の皆様方にもこの場をお借りして御礼申し上げたいと思います。お世話になり本当にありがとうございました。今後ともご指導ご鞭撻の程どうかよろしくお願い申し上げます。

（白山診療班　医学科四年　藤田　欣也　記）

立山診療班

立山連峰はその標高のため一年のほとんどが雪に覆われてしまいますが、夏の間は澄み渡る青い空と咲き誇る高山植物が、登山者を最も寛大に迎え入れてくれます。そのため多くの登山者で賑わいま

すが、その裏では遭難事故や疾病が多発しています。こうした事故・疾病に対応し、また予防、軽減しようと無償で診療所を開設しているのが立山診療班です。

立山は山岳地域のため診療活動は多岐にわたっています。往診の要請があれば夜間でもヘッドライトをつけて往診し、遭難者を搬送することになればその付き添いも行います。こういった活動は診療班だけではなく、富山県警察山岳警備隊、山小屋、環境省の方々との連携によって成り立っています。

診療活動は主にOBの先生方が行い、医学部の学生は医師の補助、管理所の清掃や炊事が主な仕事になっています。学生は医師ではないため診療活動はできませんが、実際に患者さんと接し、生の臨床の現場を見ることができるため、医学を志す者にとっては非常に貴重な場となっています。

私がこの夏印象に残っているのは、医師不在時にお腹の激痛を訴える患者さんが来られた時のことです。もちろん自分は医師ではないため何もできません。電話で医師の指示を仰ぐだけです。痛みもとってあげられません。学生では何もできない無力さと、医師の重要性を痛感し、医師の責務の重さを実感しました。非常に大切なことを考えさせていただいたと思っております。診療班には非常に貴重な経験をさせて頂きました。

最後になってしまいましたが、OBの先生方をはじめ、活動を支援してくださった皆様、十全同窓会の皆様に厚く御礼申し上げます。

（立山診療班　医学科四年　中井　雄大　記）

ACLS活動

私達ACLS(Advanced Cardiovascular Life Support) 金沢の紹介をさせて頂きます。ACLSは気管挿管、薬剤投与といった高度な心肺蘇生法を示し、心停止時のみならず重症不整脈、急性冠症候群、急性虚血性脳卒中の初期治療までを網羅したもので、日本語では二次救命処置と翻訳されます。「ACLSの知識・技術を学生同士で教えあい、共有していくこと」が私達の活動の理念です。ワークショップでは救急部からお借りした人形を使って、胸骨圧迫・人工呼吸・AEDによる除細動をはじめとした心肺蘇生に基本的な技術の習得を行い、さらに気管挿管・除細動・薬剤にまで幅を広げ知識を深めていきます。そして、最終的にはシナリオを作成し、治療のシュミレーションを行います。知識・技術だけでなく、「チーム医療の大切さが分かった」「救急医療に興味が深まった」という参加者さんの声が聞かれました。

今年度は六月に金沢大学で医学科・保健学科の学生十八名を集めてワークショップを開催した際に、北陸三県からだけでなく関東・関西・東海からも同じACLSの仲間が四十名以上集まり、協力して頂きました。そして、今年度十一月に開催された医学展には小児救急に興味があるACLS金沢の有志が集まり、一般の方に小児救急について知ってもらうコーナーを設置しました。二日間で五百人以上の方がブースに足を運び二百人近くの方に小児BLSをレクチャー致しました。一般の方にも救急医療の身近さを知っていただきAEDなどの機械の設置の普及が進む一助となればと考えております。

最後になりましたが、私達の活動を支えてくださる救急部をはじめとした先生方そして支援していただいている十全同窓会の先生方に感謝申し上げます。

（ACLS金沢代表　五年　林　恭秉　記）

ご住所やご勤務先など異動の際には下記事務局宛にご連絡下さい。

十全同窓会事務局
E-mail　juzen@med.kanazawa-u.ac.jp
FAX　076-234-4208
住所　〒920-8640　金沢市宝町13-1

第二回金沢大学ホームカミングデイ開催

第二回ホームカミングデイは十一月一日（土）に開催された。今年は卒業生一〇八人、大学役職員三十一名の計一三九人の参加があった。内容は自由見学として同時開催の金大祭の催し物、ふれてサイエンス&テクテクテクノロジー、資料館特別展の見学や、チャーターバスによる、復元壁画や角間の里などキャンパス・バスツアーも計画された。また、宝町キャンパスで開催中の医学展の見物及び医学部記念館資料室の資料公開と説明もあった（角間地区と宝町地区との間は医学展実行委員会がシャトルバスを手配）。

十五時からは自然研大講義室で開会式が行われた。校歌斉唱、学長挨拶・現状説明のあと、学生達による歓迎演奏（室内管弦楽、琴尺八、和太鼓）があった。十六時から同場所においてレセプションに移り、古川副学長の挨拶、中村学長から役員紹介に続き、佐藤同窓会連絡協議会長の乾杯で懇親パーティを開宴。卒業生は久方ぶりの再会を喜び、懐かしい学生時代と未来を語り合った。最後に全員で四高寮歌「北の都」を合唱してめでたくお開きとなった。

反省点として、前回より参加者が減ったことがあげられる。準備の遅れ、今年は三連休であったこと、懇親会費・金沢大学基金として二、五〇〇円を徴収したことなど、次年度に向けての課題が残された。最後に、部局としての御協力と御出席いただいた皆様に感謝申し上げます。

（古川　伃　記）

教授退職記念及び退任記念講演会・記念式のお報せ

本年三月三十一日を以て退職される本学神経分布路形態・形成学（解剖二）田中重徳教授、平成二十年三月三十一日を以て感覚運動病態学（耳鼻咽喉科）を退任されました古川伃教授の記念講演会ならびに記念式が左記のとおり開催されますのでご案内いたします。

一．記念講演会

日　時　平成二十一年三月七日（土）
　　午後三時から
場　所　十全講堂ホール
演　題
「崇高恩師の教訓に謝恩しての教育研究技術の開発発展と業務遂行の奮励尽力による我が大学と日本国を極上発展する秀逸人材育成の経験」　田中重徳教授
「EBウイルス研究から学んだ三十五年」　古川　伃教授

二．記念式

日　時　平成二十一年三月七日（土）
　　午後五時から
場　所　医学部記念館　集会室

なお、本年度は経費節約等のため、醵金者宛招待状は発行されません。ご容赦ご注意いただければ幸いです。

（中沼　安二　記）

四高桜募金のお願い

滋賀高島市「四高桜を守り育てる会」より四高桜募金のご案内を受けました。金沢大学同窓会連絡協議会を経て、各同窓会で会員に呼びかけることになりました。十全同窓会会員各位におかれましては、次頁の趣旨にご賛同いただける方々のご支援をお願い申し上げます。

【送金宛先】

郵便振替口座（名義：四高桜を守り育てる会、番号〇〇九三〇―二―〇二四六三六二）

（次頁につづく）

四高桜募金趣意書

ご承知の通り昭和十六年四月、旧制第四高等学校漕艇班の遭難を追悼する、四高桜の碑並びに桜並木は県内外の皆様に広く存知されて参りました。

この間、六十六年の歳月が経過いたしました。最近、特に古木の開花が悪くまた、立ち枯れする樹も目立つ為、樹木医佐野藤右衛門氏に診断をいただきましたところ

1．老樹は、てんぐす病に罹り余命1～2年の命にて、病気の蔓延防止と桜樹を労わる意味からも早急の伐採を要する。

1．四高桜の碑右側の樹は関西で見ることの出来ない菊桜※であり、これこそ四高桜として後世に残すべき樹であり、最高の追悼樹である。

1．周辺、公園の一部の土は非常に痩せ、新しい土に入れ替える必要がある。

との診断でした。

※菊桜…菊桜は藩政時代に加賀藩前田家が朝廷から下賜され、当初は御所桜、その後、兼六菊桜として門外不出の名樹として特に有名であるが、この菊桜は前田家から下賜された寺院から移植された樹と思われ、花弁は250枚程で兼六菊桜より少ない花弁は紅、ピンク、白の三色に変化し、三色が咲き乱れる様は絶佳といわれている。ソメイヨシノ桜より開花が遅い為、春には二度の花見が可能となる。石川県には前田家から下賜された菊桜が所々見られる様であるが、関西では大阪造幣局にあるとのことですが他府県については確認されていない。兼六菊桜は新宿御苑、東京博物館、名古屋では動物園に記録が残されている。

上記の診断を受け地元業者に見積依頼の結果、350万円要するとの事です。

物価急騰の折、誠に恐縮では存じますが地元並びに関係各位、四高OB、金沢大OB各位に本趣旨のご理解とご賛助を賜りますよう謹んでお願い申し上げます。

なお、ご賛助を賜りました方々のご芳名を植樹時にプレートにて四高桜に表記させていただきます。

・募集要項　一口　五千円

（接木から始まりますので植樹まで数年を要します。ご理解をお願い申し上げます。）

郵便払込票　NO、00930-2-0246362　四高桜を守り育てる会宛送付願います。

平成二十年九月吉日

四高桜を守り育てる会
会　長　今　西　　仁
副会長　池　田　幸　男（金沢大OB）
顧　問　森　平　嘉　彦（四　高OB）
事務局　社団法人びわ湖高島観光協会（高島案内所）
滋賀県高島市勝野1400番地
Ｔｅｌ　0740-36-8135
Ｆａｘ　0740-36-8159

編集後記

十全同窓会会員の皆様、新年あけましておめでとうございます。本年が母校金沢大学と皆様にとり、益々発展の年となりますよう願っております。大学、医療を取り巻く社会情勢が大きく変動する中、産科、小児科や地方の医師不足をはじめ難問山積の時代ではありますが、会員の皆様の力を結集することで良い方向に改革が進むことを期待しております。本年は医師不足対策として医学類定員増加とともに、初の推薦入学枠の募集がはじまります。特に、推薦入学特別枠は、将来、石川県の地域医療をリードする指導的人材の育成を目的としており、十年後、二十年後の成果が楽しみです。

年頭に第一四一号の会報をお届けいたします。梅田俊彦先生の金沢市文化賞受賞、古川俣先生の北國文化賞受賞、大家啓一先生はじめ八名の先生方の叙勲、心よりお慶び申し上げます。永年に亘るご貢献に深く敬意を表します。また、学会の開催、韓国ウルサン大学との部局間交流協定締結など、学術面での活発な貢献もお伝えしています。さらに、四名の先生方の教授ご就任、十全学術行脚、金沢大学（医学部）開学の起点について、医学展、西医体などの学生課外活動報告等々、多彩な記事を掲載しております。

今年も会報を通して国内外の会員の皆様に、母校の現況、会員の皆様のご活躍をお伝えするとともに、会員相互の親睦の場となれるよう努めたいと存じます。会員の皆様の率直なご意見をお寄せ頂けますよう、編集委員一同お待ちしております。一昨年より編集委員会に加えさせて頂きました。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

（佐々木　素子　記）